

半導体漫遊記

湯之上隆

(220)

筆者は日立に在籍した1987〜2002年の16年間に55件の特許を出願した。そのうち国際出願の21件は、後半8年間に集中していることもあって「特許出願は得意」という思いがあった。

ところが01年のITバブルの崩壊により、日立は大規模リストラを行ったため筆者は日立を辞めることになり、転職活動を余儀なくされた。しかし世の中は不況、筆者が40歳の大打に乗りましてたこともあり転職活動は困難を極めた。

22通の履歴書を送った会社では書類審査より先に進めなかった。そして23通目の会社でやっと社長面接にこぎ着けた。その会社が半

入っていくと、分厚いパイプファイルが5冊ほど机に並べてあった。山崎社長は「これは日立で君が出願したすべての特許だ。55件ある。全部読んだよ。すべてゴミ特許だ。一文も稼ぐことができないよ」と言った。「特許が得意」という思い

とはどういうことかというすさまじい体験をした。山崎社長率いるSELは02年当時、280人中総務部の10人ほどを除くと100人強が技術開発部隊、150人以上が特許部隊でそのうち約100人が訴訟専門部隊だった。

くってデバイス構造およびその製造技術を解明する。その後SELが権利を持つ1万件もの特許が、どこかに使われていないかを探るのである。そして「このチップには、SELのこの特許が使われている可能性がある」と判断し

SELにも敬意を表したというは思う。しかしSELのビジネスモデルには、致命的な欠点があることに気が付いた。山崎氏には入社面接でこっぴど

ちよっとは反撃してみようじゃないか。SELは技術開発を行って特許を取得し、その権利行使に全エネルギーを注いでいる。SELは新しい技術を開発することはできる

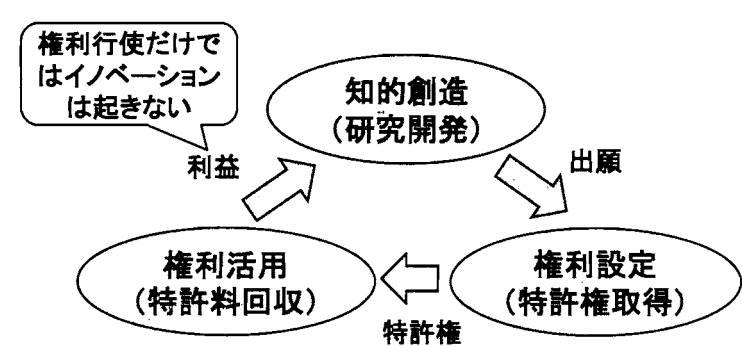
だろうし、実際行っている。しかし実際にその技術を使って製品をつくることは一切ない。またSELが開発した技術を使うには、相当な特許料を支払わなければならない。これではせっかく開発した技術は広まりようがないだろう。

特許を出願しただけではイノベーションは起きない

導体エネルギー研究所はこっぴどみじんに粉砕されてしまった。それでも山崎社長からは「才能がない特許ではなく、技術開発をやってくれ」と言われ、SELに採用された。SELで、特許で稼ぐ

例えばインテルが新しいプロセスを発売したとすると、SEL

たすると、特許部は即、インテルを訴えるのである。山崎氏が特許取得のギネス記録を更新し続けていることには脱帽するし、19年時点で社員数745人を特許料収入だけで雇用するS



特許法は、発明者に一定期間、独占権を保証することによって、天才の火に利益という油を注いだ(エブラム・リンカーン)

図1 特許とは何か

出所: 上田明博『プロパテント・ウォーズ』(文春新書)

つまり特許を取得し、その権利を行使するだけでは、その技術は普及しようがないのである。要するに、特許権の取得と権利行使だけではイノベーションは起きない。これがSELの欠点である。特許は独占権であるが、世の中の役に立たなければ意味がないのではないだろうか? (微細加工研究所・所長)